

# トルコ共和国におけるアレヴィー集団の社会的文化的現在

## カイセリ県におけるアレヴィー系協会と諸集落

佐 島 隆\*

### Alevi Associations and Cultures in Kayseri, Turkey : Preliminary Study

Takashi Sashima \*

- ・ はじめに
- ・ カイセリのアレヴィー協会について
- ・ 聖者廟のある集落を求めて
- ・ トゥルクメンの集落で聞き取り
- ・ おわりに

#### キーワード

アレヴィー、トルコ・アレヴィー、クルド・アレヴィー、ベクタシ、カイセリ、  
Alevi, Türk-Alevi, Kurd-Alevi, Bektash, Kayseri,

#### Abstract

This research is the result of surveys of Alevi cultures in Kayseri province, Turkey, based on data from ethnic groups in Alevi groups in various urban and rural communities.

It was found that many people in northern Kayseri province had come from Sivas and many in the southeast had come from Sivas, Kahramanmaraş, Adana or Tunceli, and that the province is a confluence of Türk and Kurd Alevi identities.

In the cities ritual halls, termed *cemevi*, are no longer built, but in villages a big room in a house is used. However few Alevi mausoleums were found.

*Dede*, Alevi community leaders, are active in Kayseri and some have a sense of being Seyyid (descendants of Muhammad and Ali), some Alevi believing in reincarnation.

One function of Alevi associations in Kayseri is to facilitate the exchange of information.

---

\*さしま たかし : 大阪国際大学人間科学部教授 2004.12.10受理

## 、はじめに

アレヴィーという集団は非常に捉えがたい人々であるといわれている。誤解に包まれてきたとも言える。研究者は、書籍で研究する場合、文字の範囲での理解となり、一面的になり易いところがあるため、実態調査を広域的に行い比較の視点を前提においた実態の関連の中で理解をする必要がある。また研究者が実際にアレヴィーを自称する人に出会った、出会った人からの情報によってアレヴィー全体を判断してしまうということもありえる。これもまた、誤解に拍車をかけている。トルコ共和国の中ではアレヴィーという集団が一般の多数を占めるスンニー派のトルコ人から偏見の目で見つめられてきたことから、スンニー派からの視線がいつの間にか多数の人々や研究者の視線の中に滑り込んでいることも考慮すべきことである。

アレヴィーがどのような集団であるのかについては、日本の中東研究者ばかりではなく、欧米を基本とした知的伝統の、そして科学・学問の知識の主導権を握っていたといってもよかった欧米のイスラーム研究者の中においても、誤解としか思えないような認識が訂正されないままである。

例えば辞典・事典類においては、どのようになっているのであろうか。特にイスラーム（イスラム）の事典・辞典を見てみよう。1982年に出された平凡社の『イスラーム事典』によると、「アラウィー派」の項目にアラビア語で「Alawi、トルコ語でAleviとあり、シーア派の一分派であり、ヌサイリー派とも呼ばれる」とある。この改訂版である『新イスラーム事典』が平凡社から2002年3月11日に出ている。これには「アレヴィー派」、トルコ語でAleviであり、アラウィー派を参照と書いてある。そしてアラウィー派は、ヌサイリー派とされ、シリア、トルコ南東部、レバノンに居住する、とある<sup>(注1)</sup>。「アラウィー派」が本稿で扱うトルコの「アレヴィー」と異なることは明らかである。2002年3月25日に刊行された、明石書店の『イスラーム世界事典』によると、アレヴィーの項目はなく、「アラウィー派」の項目がある。これもアレヴィーとアラウィーとを同一としており、アラウィー派はヌサイリー派とされている<sup>(注2)</sup>。トルコ東南部のごく一部にヌサイリー派が居住することは確からしいが、それとトルコ共和国を中心として、世界に広がるアレヴィーと同一にすることは誤りであることは言うまでもない。2002年2月20日に岩波書店から出版された『イスラーム辞典』に始めて、項目として「アレヴィー」がでている。トルコ語でAleviとある<sup>(注3)</sup>。イスラーム関連の辞典・事典に関しては上記のようにになっているが、文化人類学など、エスニックグループなどに関心強い方面の事典においては、筆者佐島が記述している。「アレヴィーAlevi」『世界民族事典』（綾部恒雄監修）<sup>(注4)</sup>である。一部に訂正が必要とはいえ、現時点ではこれ以上に正確な記述は他にない。

日本において、アレヴィーについて本格的に扱った学術書はまだ無い。紀行文ということにはなるが、実体験に基づいた報告として読むことができる、進藤悦子氏の『羊飼いの口笛が聴こえる 遊牧民の世界』には、バルケシル県サルクス山のアレヴィー（タフタジュ）について書かれている。また言語学の調査の途中で出会った、東南部のクルド系もしくはザザ人のアレヴィーについての記述は小島剛一氏の『トルコのもう一つの顔』に、ある程度、見ることができる。

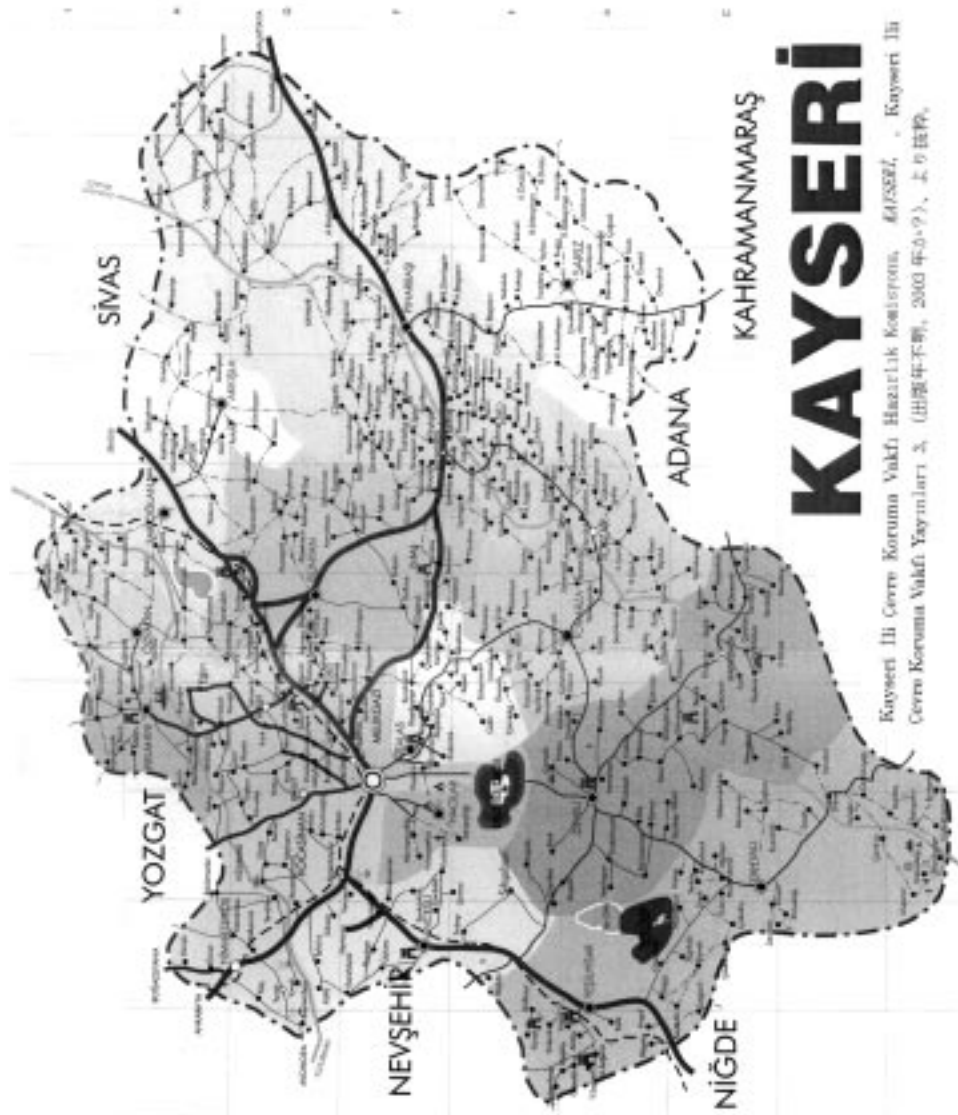


図 1

Kayseri İli Çevre Koruma Vakfı Hazırlık Komisyonu, *KAYSERİ*, Kayseri İli Çevre Koruma Vakfı Yayınları 3, (出版年不明、2003年か?) より抜粋。

以上からしても、ある程度、分かるように、アレヴィー集団をエスニックグループとして扱うとしても、そのアイデンティティは複数みられる。例えばトルコ人アレヴィー、クルド人アレヴィー、チュルクメン・アレヴィー、タフタジュ・アレヴィー、アヴシャル・アレヴィー、などがあり、複合的であり、複数あることが分かる。

これからしても、直接に現象にあたって、実態を見つめる必要がある。機会あるごとにアレヴィー集落を訪問し、あるいはベクタシ集落を訪れて、質問したり、観察をしたりしている。

今回は、2004年3月にカイセリ県カイセリ市を訪れる機会に恵まれた。それは、本学とカイセリ県にあるエルジエス大学文理学部日本語学科と学生交換の提携を結ぶためでもあった。そして、同時期に大阪国際大学国際関係研究所より2003（平成15）年度、特別研究費（研究課題「イスラーム聖者廟参詣の構造的理解——トルコにおけるスンニー派とアレヴィーの参詣の比較を通して——」（研究代表者：佐島隆））をいただくことができ、関連調査をする機会を得た。その結果の一部であることもここに明記し、感謝の意を表したい。

また、本稿を作成するにあたり、次の二つの科研も関係している。基盤研究（B）（1）「アレヴィー・ベクタシ集落における伝統的文化の変化と持続に関する調査研究——トルコおよびブルガリア——」（研究代表者：佐島隆）（2000～2002年度）。基盤研究（B）（2）「「アレヴィー・ベクタシ」集団のエスニシティと社会的文化的秩序の変化と持続——トルコ・ヨーロッパにおけるトルコ系集団を中心にして——」（研究代表者：佐島隆）（2004～2006年度）。また今回の調査に際して、カイセリのエルジエス大学文理学部日本学科長ハルク・アクバイ氏が調査の一部に同行してくれた。特に協会との渡りを付けてくださり、

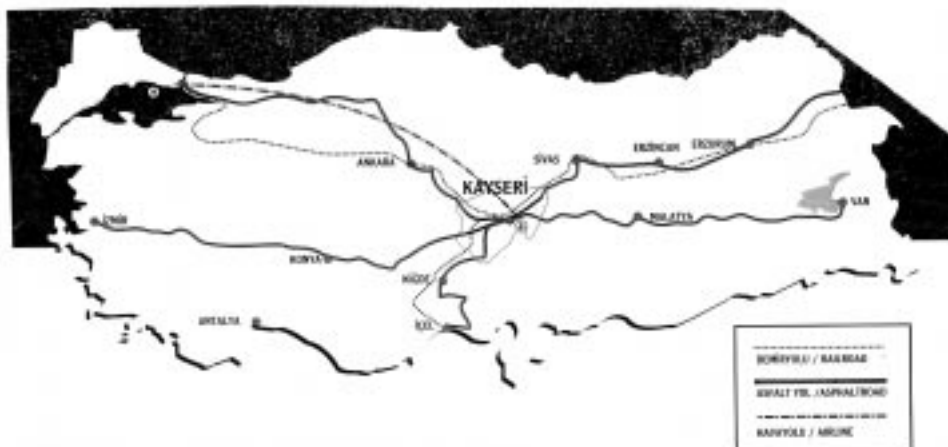


図 2

Kayseri İli Çevre Koruma Vakfı Hazırlık Komisyonu, *KAYSERİ*, Kayseri İli Çevre Koruma Vakfı Yayınları 3, (出版年不明、2003年か?) のp.6、より抜粋。

またサルズ町には同行してくださり、村にスムーズに入ることができた。感謝したい。

カイセリ県を調べようと思ったことは、カイセリ市を訪問する機会があったという偶然だけが理由ではない。カイセリ県（カイセリ市）の地理的な位置というのは、アナトリアの中央部に位置しながらも、ヨーロッパなどに繋がるイスタンブール市やエーゲ海に繋がるイズミル市にいく西部と、地中海あるいは東南部やエルズルム県やマラティヤ県などの東部へと続く要衝の地にある。（ペルシアにも通じる。）そしてアレヴィーとかなり関係があると考えられるベクタシ教団の中心地であるハジュベクタシ町とは近いし、南下すると地中海へ、東部や東南部へ通じる分岐点になっている。そのような結節点になっていると考えられる。

カイセリ県を研究対象としたもう一つの理由は、今まで、クルド人のアレヴィーを避けて、トルコ人アレヴィーを研究対象としていたこともあり、トルコ人アレヴィーの境界線がどこまでなのかを知る必要があったこと。その境界付近では、どのような状況になっているのかを観察できる可能性があると考えたからでもある。

従ってカイセリ県を調べるとすると、どのくらいの集落があるのか、そして、どのような協会をつくって活動しているのか、を調べることから始まる。内容的には、組織があるのなら組織を調べる。無い場合には、まず始めに、集落でアレヴィー文化を守って維持している様子が見られるであろう、と考えた。しかし滞在できる期間が数日しかないことから、まずはアレヴィーがどのような状況であるのか、トレンチを入れるのが第一の目的となった。全体を統轄する組織があるのかどうか確認する。次に代表的と思われるグループの中から一、二を選んで実際に見、聞き取りをする、という順になる。

アレヴィー集団の活動など集団としての特徴の一つを見ると、大雑把に二つに分けることができる。一つは、集会・結社に関する法律などに沿った組織をつくって活動をする。そのような、協会やワクフ（財団）の組織である。このような協会やワクフは都市部で作られることが多い。村落部においても作られるが、都市部においてはこのような協会をつくらないと活動できない。基盤がないということと、法律的な問題によるのである。もう一つは、村落・集落を基盤とした「自然」に形成された組織である。それは協会やワクフなどの組織をそなえていることもあるが、基本的に村落や集落を基盤にした生活形態の一つとしてアレヴィー文化があるという場合である。この二つに分けて次に見ていきたい。

以上のような方向で、今回、聞き取りや観察などによって得た結果を次に示したい。もちろん事例としては少ない、というよりも、これからという緒に着いたというのが実情である。このような情報を元にして、次の調査に提供すると共に、今後のアレヴィー研究の資料に供したい。

### 、カイセリのアレヴィー協会について

本稿の調査は2004年3月のことである。現地でその時、カイセリ市内にはアレヴィーやベクタシ系の団体としては次の二つがあるという情報を得た。即ちHacı Bektaş-i Veli Kültür ve Dayanışma Derneği（設立1993年）（ハジュ・ベクタシ・ヴェリ文化普及協会）Hacı Bektaş-i Veli Kültür Araştırma Vakfı（設立1998年）（ハジュ・ベクタシ・ヴェリ文化

研究ワクフ財団)の二つである。この二つの組織の存在に関するデータは、日本で得ていたことに後で気づいたのであるが<sup>(注5)</sup>、この二つは、結局、同一のものであった。そこでこのハジュ・ベクタシ・ヴェリ文化普及協会(以後「ハジベクタシ文化協会」)を探して、訪問し、聞き取りをした。(インタビューの相手は、協会長を中心に、3名のデデ、1名のオザンである。その他、入れかわり、会員や客人が加わり、約10名ほどになることもあった。中心的には協会長が話し、他の人は補助的に加わってきた。)

カイセリのアレヴィー集団におけるネヴルーズや定期的な行事について聞くと、その開催時期であるこの土日には行われない。ネヴルーズをトルコではノウルズとも言うが、これを行事として実施するのはクルド人の方であり、従ってトルコ人としては表だってできないし、しないというのがこの地域の慣例である。行事としてするとしても、集まって食事を食べる程度、という。

この地域のアレヴィーやベクタシについて、一般的にカイセリ県内で知ることとして次のようなことがある。

聖者ハジュ・ベクタシ・ヴェリは師イエセヴィー<sup>(注6)</sup>の命を受けて、この地アナトリアに来了。彼には子どもがいなかった<sup>(注7)</sup>。その後に出てきた中興の祖バルム・スルタンがこのベクタシの教団組織をつくった。この系統としては、十二イマームにつながると思われる。十二イマームとはアリーから始まる子孫、つまり十二代のイマームたちであるが、そのイマームの中でも第五代イマームからの系統を引いているという。第五代とはムハンマド・パーキルである。アレヴィーの場合には、指導者としてデデが共同体に關与する。デデはこの協会では3名いて、それぞれ、系統、出身のオジャク(デデを排出する親族)が違う。3人のデデとはハサン・ミュルドルHasan Müldür、ヴェリ・ヤラルVeli Yazar、イスマイル・セルヴィİsmail Serviの3人である。ハサン・ミュルドルはクレイシャンル・オジャウに属し、ヴェリ・ヤラルはババ・マンスル・オジャウに属し、イスマイル・セルヴィはデルヴィシュ・ジェマル・オジャウに属す。

このデデたちの系統は、イマームにつながるとされる。イマームにつながるとすると、ハサンにつながるのか、ヒュセイン(フサイン)につながるかで、系統が違う。ハサンの子孫はハサニーといわれ、フサインの子孫はフサイニーといわれる。この由来名のことはニスバ(由来名)といわれるようだ。

自分の正当性の由来として、この預言者あるいは預言者の家族、その家族を聖家族というが、その聖家族、つまりエフリ・ベイト(トルコ語) アフル・アル=バイト(アラビア語)につながることで、自分が預言者につながり、共同体の指導者としての正当性・正統性を持っていると主張できることになる。しかし彼らは必ずしも血縁で繋がるとは限らない。

預言者や聖家族につながる人のことをセイイド(サイイド)あるいはシェリフ(シャリーフ)ということがある。ここの人(当協会の人ということ)は、父親の系統(soy)がイマームにつながるとセイイドといい、母親の系統(soy)がイマームにつながるとシェリフという言い方をすることがあるという。その他にも、ハサンの系統がセイイドで、フセインの系統がシェリフという言い方もあるらしいが、ここではそうは言わないという人



もいた。

アレヴィーは、一種の宗教共同体であると考えることができる。とは言っても、それはタリカト（教団）ではなく、そしてメズヘブ（法学派）という訳でもない。そこで実際の生活や行動は何に従っているのか、つまり限りなく法学派を問う質問をすると、この人はジャーフェリーヤと答える人がいる。つまりジャアファル・サーディク<sup>（注8）</sup>の法学派に従うとは言う。しかし、実際には彼の『ブイルク』に従うのかどうかは疑問である。他でも同様の質問をすると、同様の答えを得ることができるのであるが、実際に見る限りは、『ブイルク』の指針に従って生活してはいないと考えられる。

サルズ郡のアレヴィー系集落であるダルデレ村（Darıdere Köyü）にはサル・サルトウク霊廟（Sarı Saltık Türbesi）がある。そこにはドゥルル・デデ（Dullu Dede）がいる。

この辺りの緒村落の起源、移動についてみると、一般にこの辺り、サルズ郡のアレヴィーはスィヴァスから移ってきた人たちであるといわれている。カイセリ県の周辺でも、カンガル郡、シャルクシュラ郡、ザザ地域、エラズー県、マラティア県などにアレヴィーの人々がいる。カイセリ県内のアレヴィーたちは、スィヴァス県のパナズ村などから来た、スィヴァスつながりの強い人々である。ザザ人というのは、クルド語とも違ったザザ語を話す人々であると言われ、クルド人ともトルコ人とも民族系統の違う人々である。（以前は、ザザ語はクルド語の中に含まれるとみなされていたのである。）協会長は、ザザ語は分からないけど、同じみたいだと言う。

この地区のアレヴィーの人々は、ラマザン（断食月）のオルチ（断食）をしない、あるいは別の仕方をする、と言う。

イスラームの人々の中で暮らしていたキリスト教の女性が亡くなった、ということがあった。スンニー派の人々であるとする、彼女の死に対して、ドゥア（イスラーム的なお祈り）を唱えるであろう。しかしアレヴィーの中でキリスト教の女性がなくなったとして、おそらくアレヴィーであればドゥアは唱えないであろう。協会長は「ムスリム（イスラーム教徒）」であるけれどもドゥアを唱えないのだ、と語る。

アレヴィーに特徴的な思想の一つである、と以前、言われることのあった輪廻の思想について聞いた。すると、協会内の部屋で話していた、座っていた4、5人のほとんどの人が、輪廻を信じていると言う。ルフ（ruf、魂）が生まれ変わるのだ。そしてさらにそこに座っていたほとんどの人が身を乗り出す形で、声を大きくして「信じている」という。たまたまそこに居合わせたスィヴァス出身者も、そしてオザン（楽器演奏者）のインジェinceさんも信じていると言う。（案内をしてくれたハルク氏は、アレヴィーに帰属しない人であり、スンニー・トルコ的な人であると思われるが、仏教的なことにも興味を持っていることもあってか、輪廻の話聞き、ひどくショックを受けた。イスラームの中に「輪廻」を信じていると断言する人がいることに驚いているのである。）

ちょうど、この時に、ジェム・ワクフ<sup>（注9）</sup>らしき所からファクスが来た。後で確認し、ジェム・ワクフと知る。そのファクスの内容は、カイセリ地区はこの協会が代表となって、ここから代表者を出せということだった。それを受けて、協会長Başkanが、デデの参加も必要だといい、デデであるハサン・ミュルドゥル氏に、参加を要請していた。ジェム・

ワクフは、この協会と別の組織である。しかしジェム・ワクフとは協調して行きたいという協会長の方針である。（その傘下に入る気持ちも無いようであるが。）

### 、聖者廟のある集落を求めて

カイセリ市内からサルズ町の村営バスで行ったのは3月21日であった。サルズ町の中心地まで2時間という情報があった。村営バスのターミナルに行くと、ほとんどドルムシュ（相乗りタクシー）状態であった。しかも立ち席の人も多く、非常に混雑し牛詰め。次第に山の方に登って行った。まっすぐに目的の町の中心に行くのではなく、途中で、降りる村があれば多少の遠回りをしてもしこちらに行き、幹線道路に引き返しては、また進むといった調子であった。また、途中で、車を連ねて多くの人が集まっていた。聞くと選挙関連の演説に集まってきた人々であった。

3月28日は統一地方選挙の投票日であるという。国会は21日の現在、AKP（公正発展党）が第一党で、CHP（共和人民党）が第二党である。この路上で話をしているのは、サルズ町内で演説会をするAKPの人々であるという。第一党であるAKPの党員を選挙で選んで、政権の方からの予算獲得を目指すというのが、多くの地方選挙民の思惑でもあるようだ。新聞に「バシカン（地方政庁の首長）はよい、しかしAKPは…」というタイトルで記事を書いてあるのを見た記憶がある。地域の代表であるバシカンに対しては嫌悪感がないが、第一党のAKPと首相のエルドアンに対しては好ましく思っていないということを示唆している。（AKPはイスラームの「原理主義」的な傾向が強いと言われる。）

まずベレディエ・バシカンを選挙で決める。直接選挙である。それとムフタル（村長）も同日の選挙で決める。ムフタルも直接選挙である。

ところで、村営バスでいくとサルズ町まで3～5時間かかった。しかも高原といわれるカイセリの町中から、さらに山頂が間近に見える所がサルズ町である。後で聞くと、海拔1800mくらいであるという。高原の町ということが即座に分かる空気の澄んだ感がある所である。空気が鮮烈と言える、突き刺さるような、鋭い涼しさを持った空気である。後でカイセリの町に戻った時には、空気が排気ガスでいかに汚れているのかがはっきりと分かるほどであった。特に幹線道路の大きな道路脇を歩くと、喉を悪くしそうだと言った危機感を深くする。もちろんアンカラやイスタンブールには比べるまでもないが。

サルズ町からその周辺の村に行く途中には、小川が流れているが、その途中にアラバルク（Arabarık 鱒）の養殖場があった。山間部の溪流や小川で、アラバルクの養殖はよくされている。他の所でも（例えば、アンカラなど）アレヴィー系集落に行く時にアラバルクの養殖場を見ることが何度あった。それだけ山間部であり細々とした小川の流れる地区に集落が位置していることになる。峠越えを幾つか経験したところから、山の稜線に近いところであることも分かる。

サルズ町の町並みはさほど大きくはない、トルコのどこでも見られそうな所である。公式の人口4410人。サルズの町には周辺の村々から集まっているとのこと。従って、アレヴィーが周辺に多いことから、この町の中にはアレヴィーの人々も多いという。

サルズ町に到着すると、町の中心部にいる電気修理屋エロル・ポラト（Erol Polat）氏、



39歳を尋ねた。彼が、この周辺の案内をしてくれた。彼はアダナ県のツアナ（Tuana）から来た人であるらしい。ツアナというのは、メルジャの隣あたりというが、確認が取れないので位置不明である。

この地区で一般的な祭りとしては、夏にサナト、つまり祭り・芸術祭をする。また、行事としてはフドレルズがある。

この地域におけるアレヴィーの村は、次の集落が挙げられた。

サンジャクアウル（Sancakağıl）村。

タヴラ（Tavla）村。この村はスイヴァスから来たとされる。

オルデキリ（Ördekli）村。これはクルドが起源（köken）とされる。トゥンジェリ出身という。

チャーシャク（Çağşak）村。この村はスイヴァスから来たとされる。

ダルルカヴァク（Dallıkavak）村。

クルクスラク（Kırkırak）村。

ダルデレ（Darıdere）村。

ギュムシャリ（Gümüşali）村。

キュチュク・ソヴェチメン（Küçük Söveçmen）村。

（ただしブユク・ソヴェチメンBüyük Söveçmen村は、アレヴィーではない。）

ブユク・オルチュリュ（Büyük Örtülü）村。

キュチュク・オルチュリュ（Küçük Örtülü）村。

キュチュク・カヴァクテペ（Küçük Kavaktepe）村。

この13か村がすぐにあがってきた。

この各村にジェムエヴィCemeviがあるという。ジェムエヴィとは集会所であるとともに、儀式を行う場所でもある。しかし聖域的な色彩は薄い。ただしこの町サルズの中心部、市街地にはジェムエヴィはない。しかし大部分、これらの村のほとんどは、村の中の家の中でも広いところ、広い部屋をジェムエヴィとして使う、という。

そこで、これらの村の内、町から遠くなく、聖者廟がある所はダルデレ村であると紹介された。ダルデレ村を訪問した。

このダルデレ集落は、309年前にスイヴァス県からオバジユク村（Ovacık köyü）に来て、そこからこの村へと来た。スイヴァス県の前はトゥンジェリ県にいた、という伝承がある。

スイヴァス県からこの近くに来たものとしては、タヴラ村に来たのはシネミルリ（Sinemilli）部族である。チャーシャク村に来たのはタフキルリ（Tafkirli）の支族であり、クルクスラク村に来たのもタフキルリ（Tafkirli）であり、この二つはマラティア県につながる。

この村での話者はユスフ・デデ（Yusuf Dede）である。彼は、この村の唯一のデデであり、聖者廟（türbe）を現在作っているところである。その聖者廟は村はずれにある。ただし、サルズ町から行くと、村の始まりの辺りにある。集落からすると、村はずれに当たる。その聖者廟の名前は、コルクサオウル・ユスフ廟（Korkısaoğlu Yusuf Türbe）で

ある。建設は1991年のことであり、そこには1242-1314とあり、1242年に生まれ1314年に逝去した人物であるという伝承のある人物であることが分かる。この年がヒジュラ暦であるとする、グレゴリウス暦になおすと、およそ1826～1896年である。廟はまだ建設途中である。

ユスフ・デデはデデとしての系統がサル・サルトウク・オジャウ (Sarı Saltuk Ocağı) に属す。このサル・サルトウクという人物はバルカン半島の中でも、マケドニアに位置するところを拠点にして活動したとされる(12世紀頃の)聖者であるらしい。

ユスフ・デデによるとアレヴィーの活動などは、次の通り。

毎週木曜日の夜にジェム集会を行う。場所はジェムエヴィが通常であるが、この村には現在ジェムエヴィがないので、家の中で行う。家の中の大きな部屋で行う。フドレルレズの時にジェム集会らしきことを行う。

断食については、ラマザン月(断食月)に断食をアレヴィーの人々は、通常、しない。ユスフ・デデの解釈によると、ラマザン月の中で断食をしなければならないのは3日間のみである。もちろんヶ月間断食しても構わない。フドレルレズの時にYedi Oruç(7日断食)をし、ラマザン月終了後10日後にOniki Oruç(12日断食)をする。また、アシュレ・オルチ(Aşure Oruç)をとる。アシュレの日というのは、ムハッレム月の10日目である。その日、1日断食をとる。その他に、断食をするとすると、個人的に金曜日ごとに断食をする人もいる、という。

ジェム集会においては、民衆裁判もあるらしい。最も悪い罪があるとなるとドュシュキュンとされ、ジェム儀礼の中の裁判で罰が言い渡される。しかしこのところジェム集会が開かれていない。

ジェム集会の時には、通常、デデとしてこの村のユスフ・デデが関わるが、実際には一番のデデは他所から呼んでくる。そのデデがデュシュキュンなどの判決を言い渡したりする。その場合の最上位のデデはスィヴァス県から呼んできて、その役割をお願いする。そのデデは、アヴチハン(アウチャン?)・オジャウ(Avuçhan Ocağı)のデデであり、スィヴァス県のユルドゥゼリ(Yıldızeli)郡から来る。スィヴァス県から来てジェム集会の時にのみ関与する。

## 、トゥルクメンの集落で聞き取り

ハジベクタシ文化協会を訪問し、どの集落に行くのか情報を仕入れてた。当初は、デヴェリDeveli郡あるいはトマルザTomarza郡に行くつもりでいた。その時得た情報の幾つかを次に示す。

デヴェリDeveli郡では、アレヴィー関係の村は5ヶ村ある。デレバシュ村(derebaşı küyü) チャドルイェリ(Çadıryeri)村、ゲズベリ(Gezbeli)村、ムフタル(Muhtar)村、カヤブナル(Kayapınar)村である。デレバシュ村に行くとしたならば、村在住のホジャ(hoca)であるドウルスン(dursun)氏を訪ねるとよい。

近辺の聖者廟で有名な所とすると、カフラマンマラシュ(Kahramanmaraş)県のパザルジュク(Pazarcık)郡にあるエリフ・アナ廟(Erif Ana Türbesi)に行くといふ。そこに

はメフメト・ババ (Mehmet Baba) がいるので、彼にから情報が得られる。同じくパザルジユク郡にクト・アリ廟 (Kut Ali Türbesi) がある。マラティヤ (Maratıya) 県にはゼイネル・アビディン廟 (Zeynel Abidin Türbesi) がある。

もしも、トマルザ (Tomarza) 郡に行くとするならば、この協会によく来るメンバーがいるとのことで、情報を紹介された。彼らというのはダーユルドゥ村 (Dağyuldı köyü) に住んでいるバイラム・クルチ (Bayram Kırıcı)、アリ・テムル (Ali Temur)、ハサン・テムル (Hasan Temur) の三人の中の誰かに聞くと情報が得られる。

カイセリ県内では他にアレヴィーの居住地はある。例えばサルオラン (Sarıoğlan) 郡であれば、カラオズ (Karaözü) 村、イエリクユ (Yerlikuyu) 村、カルプナル (Karpınar) 村、イイデリ (Yiyideri) 村、カレキョイ (Kaleköy) 村、ブルンオレン (Burunören) 村にアレヴィーが居住している。その村々からは、この協会に來ている人々がいる。他にも、フェラーヒエ郡やオズヴァタン郡などにも居住しているという資料がある。

結局、トマルザ郡トクラル町ダーユルドゥ村に行くことに決めた。村営バスで、まずトマルザ行きに乗る。トマルザ止まりだったので、そこでタクシーに乗ろうとすると、乗ってきたドルムシュが村まで連れて行く、と急に白タクになった。実際どのくらいの距離であるのか見当がつかなかったので、高くてもそれに乗るしかなかった。

ダーユルドゥ村に着くと、バイラム・クルチ氏を捜した。その家までドルムシュの運転手は連れて行ってくれた。ドルムシュの運転手は峰続きのアスランタシュ (Aslantaş) 村の出身であった。道の続きからすると、一旦トクラル町に戻ってダーユルドゥ村からアスランタシュ村に行かなければならないのであるが、峰続きであるから歩いていけるという。車であれば20分でアスランタシュ村までいけるという。

バイラム・クルチ氏の家、家屋はベイ・ダー山 (地図ではビュク・クズル山2176mとある) の頂上が眼前にすぐに見えるヤイラ (高原)、なだらかな山腹のところであった。遊牧を営んでいた人の野营地がそのまま家になっていった感じのところである。バイラム・クルチ氏は35歳であり、出稼ぎで2年間シベリアに行った。現在はこの地にいるが、出稼ぎができるのであれば、すぐにも行きたいとのこと。シベリアは大変なところであった。シベリアで仕事のできたのだから、どこにでも行ける、という。通常のこの村の人はドイツに行くことが多かった。バイラム氏の兄弟はサウジアラビアに行った。リビアに行く人もいる。今は、ドイツには新たに入ることができない。だから筆者に、日本に連れて行ってくれ、という。ともあれ、彼バイラム氏の話は次の通りである。

このダーユルドゥ村の名前は、30～40年前までキュンベティル (Kümbetir) 村と言った。現在のこの村の戸数は45～60軒である。しかしその非常に多くの人々が出稼ぎに行っている。

彼によると、ダーユルドゥ村はアレヴィーの村であり、ベクタシの村である。アレヴィーとベクタシは一つである、と言う。そして、トルコ人でもなければクルド人でもない。単にアレヴィーでベクタシあるという。アレヴィーとベクタシは二つで一つである (ikiside bir) と言う。テュルクメンということでもないらしい。ただし叔父の嫁がクルド人であるという。別段に、クルド人に対して差別とか排除をするということはないようだ。

ここから2kmのところ集落がある。その村はチャヤンル(Çayanlı köyü)村と言う。1987年にこの村から分かれて村となったのであるが、一応こちらの村に属することになる。バイラム氏の妻はその村の出身であるという。

ダーユルドゥ村、つまり旧名キュンベティル村はホラサンから来たと言われている。ハジ・ベクタシ・ヴェリの系統(soy)をひいているという伝承もある。そこから流れてきたという。この村は古い村である、という。1600年ぐらいからであろうか、400年ぐらい、ここに居住しているとされる。昔はこの村にアア(ağa)がいた。1900年ぐらいまでとされる。自分の父がアアであったかもしれない、と彼は思っているという。アアは羊を飼ったり、村を色々と統括したりした首長(旦那)である。

チュルクメンTürkmenのスンニーであれば、チュルクメンの中でもアヴシャルAvşar族がトマルザ郡やサルズ郡やプナルバシュPınarbaşı郡に定着した。1865年に定着した<sup>(注10)</sup>。

チュルクメンのアレヴィーであれば、カイセリ県でも、フェラーフィエFelahiye郡アジュルルAcırlı村に定着した。チュルクメンのアレヴィーでも、アヴシャル族であれば、トマルザ郡のトクラル(Toklar)町の中に定着。それはキュチュクジャンル(Küçükcanlı)村、ハリルバシャウシャウ(Halilpaşausağı)村、メリクオレン(Melikören)村、メリクヴィラン(Melikviran)村、ハリルバシャウシャウ(Halilpaşausağı)村である。

カイセリ県でクルド系のアレヴィーは次のところに定着した。サルズ町の町中、そしてブクオルトユリュ(Büyükörtülü)村、チャーシャク(Çağsak)村、ダルルカヴァク(Dallıkavak)村、ダルデレ(Darıdere)村、ダヨルク(Dayoluk)村、ギュミュシャル(Gümüshalı)村、インジェマアラ(İncemağara)村、クルクスラク(Kırkısarak)村、キュチュクカバクテペ(Küçükkabaktepe)村、キュチュクオルトユル(Küçükörtülü)村、キュチュクショチュメ(Küçüksöçüme)村、タヴラ(Tavla-köy<シネミリSinemili>)村、テクニリ(Teknili<デシチエDeştiye>)村である。その他にもトマルザ郡の中にアレヴィー・クルドの村が幾つか存在する。

トマルザ郡(Tomarza Kaza)は人口11000人であり、40くらいある集落の内2村は完全なアレヴィー・ベクタシの村である。その他ではアレヴィーとスンニーとか別の系統と混合している。例えば、キュチュクジャンル(Küçükcanlı)村であればアレヴィーとスンニーが混合しており、45軒の内20軒くらいがアレヴィーである。メリクオレン(Melikörenあるいは?Melikviran)村であれば、50軒の内15軒がアレヴィーである。ピュユクジャンル(Büyükcanlı)村では200軒の内15軒がアレヴィーである。アヴシャルソウトリュ(Avşarsöğütü)村では15軒くらいがアレヴィーである。

ジェム儀礼は1975年以降行われていなかった。それまではデデもいたので、儀礼を行っていたが、デデが死んでからというもの、開催しなくなっていた。その後、1997年にジェム集会をしようという気運が高まり、実施することになった。その時のデデはアダナ県から呼んだ。ヒュセイン・ヤルチンという人で、当時退職した教員だった。そこでヒュセイン氏に話を聞こうということで、バイラム氏がすぐに電話をしてくれた。しかし電話がつながらなくなっており、この線でのつながりは、とぎれた。97年のジェム儀礼の時にはチャヤンル村と一緒にジェム集会をした。

1986年にこの村にジャーミーを作った。アレヴィーにとってモスクは必要のないものである。当然のように、今ではイマームはいない。教師（イスラームの説教師のことらしい）はいた。現在はジャーミーは閉鎖されている状態と同様であるという。

結婚式では、法的に正式な書類をトマルザ郡の役所に提出する。イマームも関係しない。デデはいないので、ここでは結婚式とデデは関係ない。

葬式では周辺にいるイマームが来て所定のことを行う。葬式では食事を出したりし、遺族は皆、わんわん鳴く。遺体は土葬で埋葬するが、仰向けに寝かせ、顔を横に向かせて、その顔の向く方向はクブレ（メッカの方向）であり、その方角は同時に太陽を向くことになる。

ミューサーヒプリキ（müsahtıplık）はカルデシリキ（兄弟づきあい）として現在も続いている。しかしパイラム氏自身は、その関係を結んでいない、という。おそらく、75年にジェム集會が行われなくなったので、その関係を結ぶことができなくなったのであろうと考えられる。十二ヒズメト（12 hizmet）については分からない、という。

パイラム氏は、ハジ・ベクタシ・ヴェリは良い人だという。しかしそれ以上に彼との関係は何もないように見受けられる。（知識の点でも多くはないようだ。）ただしハジ・ベクタシ・ヴェリ記念祭（8月16～18日）には行くよとか、行ったよという。

ジェム儀礼が行われるのは、12月など冬の3ヶ月の間であった。パイラム氏の知る限りでは、楽器サズもなく、演奏者のオザンもいなかった。それは口で行なった。今ではサズでセマーを踊る。（アレヴィーが使用する楽器はサズではなくパーラマである。形は類似している。）踊りのセマーフは年とった高齢の人ができる。若い人は適当に踊っているという。カイセリ市内にはセマー・エキプレル（セマー実施集団）がある。（おそらく決まった形で知識をもっているかどうかということによって踊り方が異なるのであろう。）

この村に決まったジェムエヴィがあったわけではなく、村の中でも大きな家の人の大きな部屋で行なった。彼は、カイセリ市内のハジベクタシ文化協会やワクフへは、時々行くという。

断食については、ムハッレム月1～12日まで断食をする。それをしなかった場合には、フドレルレズの時に3日間断食をとる。その他に志願者は木曜日の昼から日没まで断食をする。

シェケル・パイラム（断食明けの砂糖祭り）は「好きでない」という。そもそもその時期の断食をしないので、異なる習慣と認識しているようだ。クルバン・パイラム（犠牲祭）は他のトルコ人と同様にお祝いをする。この行事については違和感、異質感がないようだ。

ネヴルズはしていない。ネヴルズをするのは、クルド人であるという。自分自身をクルド人とも区別していることが分かる。

スュンネット（sünnet、割礼）は男子に行われる。割礼で施術をするのは、ドクトルつまり病院の医者が切るらしい。これにイマームもデデも関係しない。1950年代、1960年代にはアブダルラル（Abdallar）がここにいたので、彼らが割礼の施術をした。ただし、その後、アブダルたちはカイセリに移住したらしい。（アブダルも独特な文化をもつエスニッ



ク・グループである。)

28日が選挙であるので、その話になった。彼はアタチュルクはすばらしい、という。だから初代共和国大統領の路線を継承し、アタチュルクが作ったCHP（共和人民党）を支持するという。AKP（公正発展党）は嫌いであるという。なぜ嫌いなの？と聞くと、嫌いだから、と答えた。そしてdinciつまりイスラームに狂信的であるから嫌いだと答えた。

昼ご飯といって、私に3時過ぎの遅い食事を、食べるといって、出してきたものは、白チーズ、ヨーグルト、トマト、ゆで卵、パン、紅茶などであった。

### 、おわりに

以上のことから、カイセリに関するアレヴィーのことで知り得たことを次に簡単にまとめて、結びにかきたい。

カイセリのアレヴィー集団は、ひとまとまりではなく、外から来て定着した集団が多い。フェラーヒエ地区は、スィヴァス県から来たとする集団であり、サルズ地区ではスィヴァス県からの人、カフラマンマラシュ県やアダナ県やトゥンジェリ県などの外からの人々、そのような伝承もなく、この地に定着している人々がいる。居住地を見ると、スィヴァス県やヨズガト県などの県境に近い地域、カフラマンマラシュ県やアダナ県の県境に近い地域に居住している。平地よりも、山間部に居住している人が多い。

アレヴィー集団の人たちは、アレヴィーといっても、クルド・アレヴィー、チュルクメンのアレヴィー、アレヴィー・ベクタシなどの帰属意識を持つ人々であった。つまり複数のアイデンティティを持つ、複数の集団が共存していることが分かる。その中にはクルド系であることを語る人々もいる。もちろん土着の人々もいる可能性があった。また、デヴェリ地区の人々については未詳である。

アレヴィー共同体の指導者として関わるデデは、外から呼ばれることが多いのだが、出身地のスィヴァス県やアダナ県などから呼ばれている。その結びつきは出身地との結びつきを確認しているようにさえ見受けられる。

セイイトの系譜を意識し始めていることが分かる。もともと血縁があるのかどうか非常に疑わしいが、セイイトということで、イスラームの預言者の系統に結びつけ、共同体の指導者であることの正統化を確保したいという推測ができそうである。ともかくもセイイトに結びつけたいということで、その知識を得ようとしている様子が見られる。（これは同時にイスラームの中に位置づけることになる。）もちろんこのセイイトたちは、アラブ地域のセイイトとは異なるものと考えられるかもしれない。トルコ系の民族に属する人々が、明らかに異なるにもかかわらず、セイイトの系譜に結びつけようとしているのである。

ジェム・ワクフとの関係は、表面的にはうまくやっていることが分かるが、しかし、何かあれば、すぐに協会独自の路線を歩むことができる姿勢をとっている、ことが分かる。

アレヴィーの人々が活動の根拠地する協会は、カイセリ市内に一つ認められる。一つしかないが、これがある程度、集会所としての情報交換の場であると考えられる。全体の統括をしようとしており、各集落から協会に行き、サロンのような場所となり、アレヴィーの

人々の結節点の役割を果たしていると考えられる。

しかしながら、儀礼や礼拝的行為を行う場所であるジェムエヴィがない。各地域の方で、集落の中にジェムエヴィを持つことがあるらしいが、町の中には余りみられない。村の方でも、各自の家の大広間がジェムエヴィになったこともあり、恒常的な場所があるわけではない。ジェム儀礼が開催されなかったことも必要性が無いことに繋がるのかもしれない。

活動や儀礼であるが、フドレルレズ、シェケルバイラム、クルバンバイラム、断食などが行われている。しかしジェム儀礼が長いこと開催されなかったことで、アレヴィー文化の強さが薄くなり、または儀礼内容が記憶にとどめなくなりつつあることが感じ取れた。

地域によっては、特に聖者が外から来たという伝承のあるところでは、霊廟がある場合が多い。しかしカイセリ県では、そのような意味での霊廟が余りない。あれば、共同体の根拠地的役割を果たしうるのである。しかし無いということは、そのような、意識を持たないのか、廟をつくるほどの定着性がまだないのか、不明である。聖者を中心にしての固まりがそのまま移動したわけではなさそうである。

思想的には、輪廻の思想がはっきりと「信じている」という発言を聞くことができた。しかしそれはスンニー・イスラームの現状からすると、表に出せず、いずれはこの人々の心の中に、記憶の中にしまわれたまま、消滅してしまう可能性もあるものであった。それから、逆に、この思想が、アレヴィーやベクタシに特徴的なものであるということで「アレヴィーとは何か」という社会的な関心が高まった時に「記憶した」ものであるかもしれない、という可能性も捨てきれない。

以上、2004年3月19日～24日の間、カイセリ県において見聞して得たことを記してきた。今回の調査箇所だけでは、当然、少ない。ある程度の感触を得ることができたが、これからさらに調査を加えて十全なものにしていく必要があると考えている。

#### 注

注1) 平凡社のこの事典の記述は板垣雄三氏の記述である。アラブの研究者であるからこのような記述になるのであろうか。

注2) この事典のこの項目の記述が青山弘之氏であることもあり、シリアの専門家であるところから来るのであろうか。

注3) この辞典の記述は今松泰氏の記述になるが、アレヴィーとベクタシとの関係や、社会状況との関係など記述内容に誤りが非常に多いが、ともかくも、項目として取りあげられていることが、特筆される。編者の方針であらう。

注4) 佐島隆「アレヴィー-Alevi」『世界民族事典』(綾部恒雄監修) 弘文堂、2000年(平成12年)7月、p.58～59。

注5) 佐島隆編『アレヴィー・ベクタシ集落における伝統的文化の変化と持続に関する調査研究 トルコおよびブルガリア (第 分冊)』科研報告書、平成15(2003)年、p.20。

注6) アフマド・ヤサヴィーのこと。中央アジアのスーフィー教団イエセヴィー(ヤサヴィー)教団の名祖である。?～1166/7年。

注7) 伝説により、ハジ・ベクタシヴェリの子孫を自称する集団がある。子孫はチェレピーレルと言いい、その当主はハジュベクタシ町に住んでいる。

注8) ジャアファル・サーディク(699/702～756年)は十二イマーム派の第6代イマームで、シー

## 国際研究論叢

ア派法学の基礎を築いた学者である。この法学派に従う者をジャーフェリーヤ（ジャアファル派）という。

注9) ジェムワクフは、アレヴィー系組織の中でも最も有力な団体の一つであり、イスタンブルに本部を置く。ドイツにもネットワークを持つ。ワクフ長はイZZエッティン・ドアンであり、政府とも連携しながら、アレヴィーの権利をジェム・ワクフ主導で獲得しようと活動している。

注10) この時期で考えると、クリミア戦争などの戦乱による移動も考えられるが、この地域からすると、1865～66年オスマン政府が東南部で遊牧民を強制的に定住されたことが、影響があったと考えることができる。これに従わない者はバルカンや西アナトリアへ追放された。

## 参考文献

小島剛一『トルコのもう一つの顔』中公新書、1991年。

佐島隆「アレヴィーAlevi」『世界民族事典』（綾部恒雄監修）弘文堂、p.58～59。2000年（平成12年）7月。

佐島隆編『アレヴィー・ベクタシ集落における伝統的文化の変化と持続に関する調査研究 トルコおよびブルガリア（第 分冊）』科研報告書、平成15（2003）年。

佐島隆編『アレヴィー・ベクタシ集落における伝統的文化の変化と持続に関する調査研究 トルコおよびブルガリア（第 分冊）』科研報告書、平成15（2003）年。

佐島隆「伝承のアレヴィー・ベクタシ文化 口承・書承・多様な伝承様式」『異文化コミュニケーション研究 伝えると伝わる』（菊池繁夫・佐島隆共編）大阪国際女子大学・大阪国際女子短期大学異文化コミュニケーションセンター刊、2001年、p.97～121。

佐島隆「「スンニー化」するアレヴィー系集落 トルコ宗務庁の影響と文化的伝統の継受」『異文化コミュニケーション研究 伝達・交換・理解』（菊池繁夫・佐島隆共編）大阪国際女子大学・大阪国際女子短期大学異文化コミュニケーションセンター刊、2002年、p.193～203。

進藤悦子『羊飼いの口笛が聴こえる 遊牧民の世界』朝日新聞社、1990年。

日本イスラム教会他監修『イスラム事典』平凡社、1982年。

日本イスラム教会他監修『新イスラム事典』平凡社、2002年。

片倉もとこ編集代表『イスラーム世界事典』明石書店、2002年。

大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編『イスラーム辞典』岩波書店、2002年。

Kayseri İli Çevre Koruma Vakfı Hazırlık Komisyonu, *KAYSERİ*, Kayseri İli Çevre Koruma Vakfı Yayınları 3, (出版年不明、2003年か?)

Peter Alford Andrews, *Ethnic Groups in the Republic of Turkey*, Dr. Ludwig Reichert Verlag, 1989-Wiesbaden.